

纏向遺跡第180次調査の概要

平成26年2月9日

桜井市教育委員会

はじめに

この度桜井市教育委員会では、桜井市辻56-1において纏向遺跡の範囲確認調査を実施しました。調査にあたりましては今回も土地所有者ならびに地元関係者から多大なるご協力を賜りました。この場を借りて御礼申し上げます。

さて、今回の調査の目的は、纏向遺跡第162次、166次調査で検出した建物群より東側の遺構の状況を確認することで、一連の範囲確認調査では初めてJR桜井線の東側を調査しました。調査は平成25年10月30日より開始しており、調査面積は現時点で約205㎡となります。

これまでの調査地と第180次調査地の配置(図1)

調査地の状況(図2)

調査地は現況で水田となっており、標高は75.3m程度です。東西10m、南北20mの調査区を設定しています。遺構検出面は浅く、74.9m程度です。線路の西側より遺構検出面は約0.6m高くなっています。

遺構面は基本的に地山直上の1面であると考えています。遺構密度が高い点は建物群を検出した線路より西側の調査区とよく似ています。調査区の南側の一部には黒褐色土で埋まった河道(ないし溝?)があり、その上面でも遺構を検出しています。地山直上の遺構面と河道埋没後の遺構面は一体のものと考えています。

調査の成果

出土遺物が大量にあり整理作業を経ていないため、現時点で各遺構の厳密な時期決定を行うことは困難です。しかし、今回の調査では古墳時代中期以降(5世紀以降)の土器はほとんど認められないので、大部分の遺構がそれ以前の庄内式期から布留式期のものであると考えています。

建物F 調査区の南西で検出した柱穴で構成されます。東西2間(約3.4m)かそれ以上、南北3間(約6.7m)をはかります。西端の柱穴は、建物D東端の柱穴から約36.5m離れています。一辺0.4~0.6m程度の隅丸方形の柱穴が多いようです。一部の柱穴は布留0式期の土坑に壊されています。建物Fは、真北に対して4~5°西に振っており、庄内3式期(3世紀中頃)以前の建物B・C・Dとほぼ平行していることや、中軸線を一致させることから、建物B・C・Dと共存していた可能性が考えられます。

建物?G 調査区の北西で検出した3つの柱穴で構成されます。南北2間(約4.2m)をはかりますが、東西の長さは不明で、調査区外に展開すると考えています。その場合、東西の柱間は約2.8m以上となります。長辺約0.8m、短辺約0.5m程度の長方形の柱穴で構成されます。柱は抜き取られた痕跡が残っていました。比較的柱穴は深く、柱の下に礎板として用いたとみられる板

材が認められます。北端の柱穴が布留1式期(3世紀末~4世紀前半)の溝SD-1001に切られており、それ以前の建物と考えられます。

SD-1002 調査区東側を南北に通る溝で、幅2.5m、長さ20m以上をはかります。調査区の南北に続いていきます。土器から、布留0式期(3世紀後半)に下層が埋没し、布留1式期(3世紀末~4世紀前半)に上層が埋まったと考えています。真北に対して2~3°東に振っています。

SD-1006 調査区北側で検出した東西溝で、幅約2.5m、長さ10m以上をはかります。調査区の東西に続きます。この溝はSD-1002に壊されています。SD-1002との切り合い関係から布留0式期(3世紀後半)に埋没したものと考えています。真北に対して東へ7~8°振っています。

SD-1001 調査区北半で検出した東西溝で、幅約0.8m、長さ6.6m以上をはかります。東端はSD-1002と接しています。SD-1002と接する部分は、平面形がラップ状に広がっています。土器から布留1式期(3世紀末~4世紀前半)に埋没していると考えています。SD-1002とほぼ直交します。

柱列① SD-1006とSD-1001の間に東西に走る柱列です。3間分(約9m)を検出しています。SD-1006と共存する可能性があると考えています。

柱列② SD-1002の西側を南北に走る柱列です。柱同士の間は2m前後です。5間(約10m)を確認しています。SD-1001を超えて北側には伸びないと考えられます。SD-1002と平行することから、共存する可能性があります。

特殊な遺物

上記の遺構にかかわらない柱穴から朝鮮半島(慶尚道か?)製とみられる陶質土器片が出土しています(図2)。またSD-1002より緑色凝灰岩片が出土しています。

まとめ

建物Fの検出により、庄内3式期を含めてそれ以前の建物である建物B・C・Dの東側にも同時期の建物が展開している可能性が指摘できます。建物群のエリアがより東にひろがるものといえるでしょう。

建物?Gは、布留1式期以前の建物である可能性が高いと考えていますが、いまのところ共存していた可能性のある遺構は不明です。

布留0式期~布留1式期(3世紀後半~4世紀前半)の溝SD-1002と柱列②は、JR桜井線の西側で検出した建物E(真北に対して1~2°東に振る。)とおおよそ平行しており、共存していた可能性が指摘できます。この推定が正しければ、纏向遺跡辻地区には3世紀前半~中頃の建物群・3世紀後半~4世紀前半の建物と区画・4世紀後半の区画溝・5世紀末~6世紀初頭の石貼り区画溝が存在することとなり、各々が首長居館の一部で、辻地区には首長居館が重複して存在している可能性を指摘できます。

